

英語コーパス学会 Newsletter No. 59

Dec. 1, 2007

■会長: 中村 純作
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第 30 回大会報告

概要

英語コーパス学会第 30 回大会は、10 月 6 日(土)、立教大学池袋キャンパスで開催されました。池袋駅から徒歩約 7 分という立地条件の良さもあって 95 名(会員 80 名、当日会員 15 名)の参加がありました。ちなみに午前中のワークショップの参加者は 57 名でした。

午前中のワークショップは「R を用いたコーパスデータの統計解析」と題して金明哲先生(同志社大学)に講師を務めていただきました。コーパスデータを統計的に解析する場合、従来市販の SAS、SPSS、S-PLUS 等の利用に頼ってきましたが、機能が複雑であることや頻繁に出される改訂版にかかる費用等の点で敬遠する研究者が多くいる現状から、無料のソフト R の普及が急速に伸びています。ワークショップでは、実例を使って R の基本的操作、データ解析の方法、推測統計等を解説していただきました。非常に有意義なワークショップであったという感想を参加者から聞きました。アシスタントとして投野由紀夫先生(東京外国語大学)、小林雄一郎氏(法政大学大学院)、石井康毅氏(東京外国語大学大学院)にお世話になりました。講師の先生、アシスタントの方々はこの場をお借りしてお礼申し上げます。

午後の大会では、まず中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶がありました。その中で中村会長は、大会前日の 10 月 5 日に開催された運営委員会でも来年 3 月 31 日を持って任期満了になる会長を退任することが承認されたことと、赤野一郎先生(京都外国語大学)が満場一致で次期会長(任期は 2008 年 4 月～2010 年 3 月)に選出され、本人の承諾を得たことを報告されました。その

後、開催校を代表して服部正治先生(立教大学総長補佐)にご挨拶をいただきました。引き続き学会賞選考委員長の投野由紀夫先生(東京外国語大学)から本年度は該当者がなかったという選考結果が報告され、現在、奨励賞に応募が 1 件あるがさらなる応募を期待する旨の話がありました。

研究発表は、第 1 室で 3 件(英語史、語彙の統計処理、文体論)、第 2 室で 2 件(英語辞書の日本語の量的分析、英語学習者の使用語彙)の発表がありました。シンポジウムでは滝沢直宏先生(名古屋大学)の司会のもと、「他言語コーパス研究の現在: 英語研究への示唆」というテーマで 4 人の講師の先生方に発表していただきました。日本語、フィンランド語、タガログ語、フランス語コーパス研究の現状を通して英語研究で学ぶべき視点が垣間見えた発表であったと思われま。研究発表、シンポジウムの概要は司会を担当された先生方にご執筆いただきましたので、下記の「研究発表」と「シンポジウム」のセクションをご覧ください。

大会終了後の懇親会には 40 名の参加があり、倉本充子先生(広島国際大学)の司会のもと、中村会長の挨拶、中尾佳行先生(広島大学)の乾杯の発声で懇親会が行われました。研究発表、シンポジウムに関して会場を移しての意見交換、会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 8:30 にすべての大会行事が終了しました。

開催校責任者の鳥飼慎一郎先生のご尽力とご協力で盛会に終わったことを喜び、厚くお礼申し上げます。また午前中のワークショップ、大会の受付等で献身的にご協力いただいたメディアセンターの職員の方々とアルバイトの学生諸君にも紙上をお借りして厚くお礼申し上げます。

研究発表

古英語詩における語順決定要因の解明とデータベースの構築

鈴木 敬了(大東文化大学)

古英語詩散文の語順に関する研究はかなりの程度なされているが、古英語詩に関する語順研究は少なく、また散文とは異なる現象が見られる。散文では、‘heaviness’や‘extra element’などが語順決定の要因として働くことが多いが、韻文では、その傾向は当てはまらないことが多い。当発表では、古英語散文から韻文に翻訳されたとされる Boethius 作 *De consolatioe philosophiae* (‘Consolation of Philosophy’) の韻文版をテキストとし、散文・韻文という異なるジャンルにおける語順決定要因を明らかにした。

調査の結果、韻文においては、頭韻パターンが語順決定に大きく影響していることが明らかとなった。典型的には、第 2 半行内で V のみ頭韻の場合には、VM 語順となっている。散文と韻文との対応関係から、Subjunctive に代わり法助動詞の使用が見られることなどから、法助動詞が語順決定に寄与していることが観察された。

File Maker により作成されたデータベースを紹介し、詩形や頭韻パターン、語順を指定することにより、該当例文が表示される実例が示された。

詩形との関連や散文との相関性について、質問がなされた。また、一般に法助動詞は、韻律上の頭韻を構成しないと指摘に対し、実例を示し、頭韻の事実を指摘した。

塚本 聡(日本大学)

Kenney 以降のアメリカ大統領による一般教書演説からの特徴語の抽出

大羽 良(早稲田大学非常勤講師)

本研究の目的は、ケネディから現代までの 9 人の米大統領の一般教書演説からコーパスを作成し、複数の統計指標を用いてテキストの特徴語を抽出し、上位語の特徴を見ること、それらの語がテキストのどのような性質を表すかを考察すること、また特徴語をもとにテキスト群を

分類し、特徴語が社会的状況や思想性とどのように関連付けが可能かを考察することである。

発表では、一般教書演説の特徴や演説を収集したウェブサイトなど、一般教書演説コーパスの作成についての概要が説明され、続いて各大統領、各演説の基本的語彙指標が示された。

特徴語の抽出には、ダイス係数・コサイン・補完類似度・カイ 2 乗値・対数尤度比と MI3・Log-log 値・zscore の 8 つの統計指標が用いられた。統計指標ごとに異なる特徴語が抽出され、ダイス係数・MI3 では一般的なコーパスで高頻度である語が抽出され、その後一般教書演説に共通と考えられる語が抽出されるなどの説明がなされた。

続いて、抽出された語のテキスト間の重なり度と、特徴語を用いた多変量解析の分析結果が示された。多変量解析の分析では、8 つの統計指標を 2 つのグループに分けて分類が行われ、各大統領の時代的・社会的背景をもとに、分類されたテキストの考察が示された。

質疑応答では、「’s は所有格のものではなくて、It’s などの省略形の’s の可能性はないのか？」という質問に対して、「所有格と考えてよいと思っているが、確認する必要がある」という回答がなされた。また「注目すべき単語を恣意的でなくピックアップできるような何らかの手段があればよい」という提案がフロアからなされた。

瀬良 晴子(兵庫県立大学)

コーパスと文学的読みの融合: ヘミングウェイの短編を例にして

堀 正広(熊本学園大学)

本発表では、ヘミングウェイの短編“Hills Like White Elephants”を題材に Corpus Stylistics (Corpus approach to the language of literature) の試みが示された。Corpus Stylistics は、コーパスによって得られたデータとそのデータを分析する言語理論、そして文脈的な解釈とのバランスのとれた言語文体研究である。

コーパスデータとしては、男と女の会話から別々に作られたテキストについて、頻度・コロケーションなどが示された。理論的な背景とし

ては Tannen の男女の会話スタイルのキーワードと Hoey の Lexical priming が用いられた。

ヘミングウェイの作品、特に短編においてはしばしば男女の心のすれ違いがテーマとなるが、本研究では、作品のテーマや文脈を考慮に入れながら、登場人物である the man と the girl の会話のスタイルの違いを主に the, you, we の機能語の分析を通して明らかにした。例えば女の会話中の the は、the trees, the mountains などの現実の具象物を指しているが、男の場合は、the only thing, the best thing など個人の主観性・価値観を示す例が見られるなどの違いが示された。

質疑応答では、「会話の部分はどのように抽出したのか」という質問に対して、「今回は語数が少ないので手作業であるが、大きなコーパスの会話部分の抽出はプログラミングが専門の同僚にソフトを作ってもらった」という答えなどがあった。

瀬良 晴子(兵庫県立大学)

OEDs, JUCE 中の日本語からの借用語、貸出語の形式的・意味的特徴の量的分析

藤原 康弘(中国学園大学非常勤講師)

本発表では、すでに英語辞書に採録されている日本語からの「借用語」と、日本人英語使用者が用いた「貸出語」の特徴を量的に分析し、今後英語に借用される可能性の高い語彙を提示することを目標とした。5 種のオックスフォード系英語辞書に採録されている日本語からの借用語と、日本人英語使用者コーパス(JUCE)に見られる貸出語を調査の対象とし、日本語意味分類辞書『分類語彙表：増補改訂版』(2004)に基づき形式・意味的範疇の分類を行った。その結果を Pearson χ^2 乗検定・尤度比検定等の各種統計手法を用いて量的に分析し、その結果から今後英語に借用される可能性の高い語彙について、形式範疇としては「体の類(名詞)」、意味範疇としては「人間活動・精神および行為」、「生産物および用具」、その中でも「食品」「社会」「心」などと具体的な範疇を提示した。

フロアーからはオックスフォード系辞書以外にも対象を広げるべきではないか、形式・意味範疇に加えて、その語が使用される文脈などの出現の仕方も観点として加えられるのではないかと、OED2 の辞書全体をコーパス的に活用するとさらなるデータが得られるのではないかなど、いくつかの質問・コメントが寄せられた。今後の研究の発展に寄与する可能性のある示唆を多く受け、発表者は、今回は既に利用可能であった日本語からの借用語リストを用いて分析を行ったが、今後は対象とする辞書を広げることや、新たな観点の導入など様々な可能性を検討して、研究を発展させていきたいと回答した。

加野 まきみ(京都産業大学)

英語学習者の使用語彙と発話の通じやすさの関係に関する考察：誤り語と訂正語の意味的関連性に基いて

和泉 絵美(独立行政法人情報通信研究機構)

内元 清貴(独立行政法人情報通信研究機構)

井佐原 均(独立行政法人情報通信研究機構)

本発表では、非母語での発話に含まれる誤りのうち、発話の通じやすさに及ぼす影響が大きい「語彙の誤り」について分析を行った結果が報告された。学習者データに付与されているエラータグを元に、誤り語と訂正語のペアを得、その語義の意味的関連性を複数の尺度を用いて求め、日本人英語学習者の語彙誤りの特徴を量・質の両面から分析した。その結果、意味的関連性が高いほど発話の通じやすさが増すことを定量的に示した。さらに、この分析によって得た知見を、今後の語彙指導の改善方針の提案や語彙指導のための資料作り支援に役立てる可能性について考察した。

フロアーからは、通じやすさの判定は判定者間で揺れが存在するのか、学習者の運用能力レベルによって発話の通じやすさがどのように推移するかなどの質問が寄せられた。判断の揺れについては、実際に存在し、判定者の日本在住経験などが影響すること、今後分散に関する検定を導入する意向であることが述べられた。運用レベルによる通じやすさの推移については、

レベルが上がるにつれて、「通じやすい」と判定された文の割合が増える一方で「全く通じない」文の割合には大きな差がないこと、すべてのレベルを通じて、「通じるか少し推測が必要か不自然に聞こえる」文の割合が最も多いことから、今後の分析の焦点はそのレベルの文となるであろうとの回答がなされた。また、語義の意味的関連性を測定するツールとして Web 上で利用可能な WordNet: Similarity が紹介された。

加野 まきみ(京都産業大学)

シンポジウム

他言語コーパス研究の現在:英語研究への示唆

第 30 回大会でのシンポジウムは、「他言語コーパス研究の現在:英語研究への示唆」と題して行われた。目的は、英語以外の言語におけるコーパス利用の手法や関心の在り方から、英語研究に対してどのような示唆が得られるかを考えることにあった。4 人のパネリストの発表内容は、概略次の通りである。

コーパスによる自発音声の韻律特徴の分析

前川喜久雄講師(国立国語研究所)は、韻律的特徴の精密な情報が付与された『日本語話し言葉コーパス』の利用により、韻律的特徴に関する理論研究・実験研究の成果が、大量の自発音声データに照らして検討することが可能になったことを述べられ、その成果の一部を具体的に示された。

フィンランド語記述文法とコーパスデータの役割

千葉庄寿講師(麗澤大学)は、コーパスが早くから重要視されてきたフィンランド語に関して、コーパスの分析手法についての現状紹介とともに、フィンランド語記述文法の発展におけるコーパスの役割について話された。

タガログ語データ/コーパスの質と正確

大和田栄講師(東京成徳短期大学)は、タガログ語について概観した後、スペイン語・英語からの借用語が多いことに起因するコードミキシングが、話し言葉だけではなく書き言葉においても観察されることを紹介され、この種の研究

におけるパラレルコーパスの構築およびそれを利用した研究の可能性について言及された。

フランス語の特徴的なコーパス研究:語彙研究と政治ディスコース研究

藤村逸子氏(名古屋大学)は、フランスにおける corpus は「電子化された巨大なデータ」を必ずしもイメージさせないことを述べた後で、フランスでの語彙研究とそれに付随する計量言語学的研究、また政治ディスコース研究について語られた。また、前者の研究においては、言語学と情報工学の研究者の結び付きが密接であることも指摘された。

いずれにおいても、各言語に独特なコーパス利用の現状(あるいは可能性)が示され、同種の研究を英語に関して行う際の有益な示唆を得ることができた。

滝沢 直宏(名古屋大学)

ハンドアウトのダウンロードサービス

第 30 回大会の研究発表とシンポジウムのハンドアウトの PDF ファイルのダウンロードサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより 12 月 31 日までとします。ご希望の方は、下記のご希望の番号を石川保茂先生(yasuishikawa@hotmail.com)までお知らせいただければ、追って URL をお知らせいたします。なお、発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定してあります。

1. 古英語詩における語順決定要因の解明とデータベース構築
2. Kennedy 以降のアメリカ大統領による一般教書演説からの特徴語の抽出
3. コーパスと文学的読みの融合:ヘミングウェイの短編を例として
4. OEDs、JUICE 中の日本語からの借用語、貸出語の形式的・意味的特徴の量的分析
5. 英語学習者の使用語彙と発話の通じやすさの関係に関する考察
6. シンポジウム:他言語コーパス研究の現在:英語研究への示唆

末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

コメント [a1]: 10pt に変更 (のタイトルも同様)、字間を狭め 1 行に収めました。

現会長の退任と次期会長の選任について

大会前日の10月5日午後5時30分から立教大で開催された運営委員会において現会長の退任と次期会長の選任に関する人事案件が審議されました。まず「会長の任期は2期4年を限度とする」と定めた「会長選出に関する内規」により、来年3月31日を持って任期満了になる中村純作会長(立命館大学)の退任に関する案件が審議され、承認されました。引き続き、後任の会長人事について審議が行われ、現会長から赤野一郎先生(京都外国語大学)を推薦する旨の提案があり、満場一致で次期会長(任期は2008年4月~2010年3月)として赤野一郎先生を選出し、本人の承諾を得ました。来年4月摂南大学で開催されます第31回大会から、赤野先生を中心とした新しい執行部体制で学会の運営が行われます。今後とも従来にもまして会員諸氏のご協力をお願いいたします。

第31回大会研究発表募集

2008年度春季大会(第31回大会)は4月26日(土)に摂南大学寝屋川キャンパスで行われる運びとなりました。つきましては、発表を希望される方は、下記の要領に従ってe-mailで事務局宛にお申し込み下さい。

[分野] 本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

[応募資格] 本学会員であること。

[発表方法] 発表20分、質疑10分

[応募方法] 冒頭に題名のみを記し、800字~1200字(参考文献は別)にまとめ、メール添付ファイルで送付。メール本文に氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、メールアドレス明記。

[応募締切] 2008年1月7日(月)必着

[採否決定] 2008年1月末日(予定)

[問合せ] 〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室 英語コーパス学会事務局
E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp

会誌『英語コーパス研究』第15号について

『英語コーパス研究』第15号(2008)に多くのご投稿をいただき、ありがとうございました。原稿締切時には、8件(内訳は、研究論文6点、研究ノート1点、その他1点)の投稿がありました。現在、査読審査を行っております。昨年同様、6月の刊行を予定しております。

本号では、通常の論文に加え、第30回記念大会のシンポジウムを誌上に掲載する計画を立てております。大会に参加されなかった会員にとっても英語以外の言語でのコーパス言語学の現状について参考となる情報が、紙面を通して得られます。ご期待ください。

塚本 聡(日本大学)

『英語コーパス研究』編集委員会委員長

JAECs 東支部活動報告

英語コーパス学会東支部では、第2回講演会を以下の通り開催しました。

講師：高橋薫先生(豊田工業高等専門学校)
演題：「BNCの話し言葉を分析して与えられるスタイルの解釈について」

開催日時：2007年10月7日(日)10:30~12:30
開催場所：中央大学後楽園キャンパス 3号館 3311教室

高橋先生が取得されたPhD論文の内容の部分のご紹介と、職を継続されながらの学位取得に関わる苦労話を、時にユーモアを交えながらお話しいただきました。参加者は15名ほどでしたが、大会翌日のためか関東圏以外からも参加をいただき、質問やコメントが次々出される意義深い講演会になりました。なお、詳細につきましては、Forum欄の高見敏子先生(北海道大学)による東支部講演会報告をお読みください。

東支部支部長 新井 洋一(中央大学)

コメント [a2]: 1文字空ける

2008年度の大会日程と開催校

第31回大会 4月26日(土)摂南大学

第32回大会 10月4日(土)東京外国語大学

英語コーパス学会賞募集

第7回英語コーパス学会賞を募集いたします。学会賞は英語コーパス学会の活性化のために設けられた賞ですので、奮ってご応募ください。

学会賞選考委員長 投野 由紀夫

【対象】英語コーパス学会の目的にてらし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた35歳以下または大学院修了後の研究歴5年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 所定の推薦理由書(学会ホームページより入手)。
2) 論文の場合は現物またはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので送付は不要。

【提出先】事務局

【応募期限】2008年3月31日(月)

【発表】2008年度秋季大会

新入会員紹介(12月1日現在、Sは学生)

宇佐美 裕子 ランカスター大学大学院 S
近藤 明日子 国立国語研究所研究開発部門言語問題グループ
平田 恵理 University of Birmingham S
松井 順子 明海大学

事務局から

会費納入のお願い

2007年度会費(一般5,000円、学生3,000円)を未納の方は、同封の払込取扱票をまいお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、石川

保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の会員の方々には「会費納入のお願い」を同封させていただきました。会費納入にご理解・ご協力いただきますよう、お願い申し上げます。なお、会誌『英語コーパス研究』第15号は2007年度の会費を納入していただいた方のみ送付いたしております。また、2年続けて会費未納の場合、Newsletterなどの送付を中止させていただきます。会費納入等に関するお問い合わせは、石川保茂(yasuishikawa@hotmail.com)までお願いいたします。

FORUM

JAECS 東支部講演会報告

高見 敏子(北海道大学)
takami@imc.hokudai.ac.jp

遠隔地に住んでおりますと普段はなかなか参加できない支部講演会ですが、今回、大会翌日の10月7日(日)に東支部講演会が中央大学後楽園キャンパスで開催され、大変ありがたい機会になりました。講師は高橋薫先生(豊田工業高等専門学校)、演題は「BNCの話し言葉を分析して与えられるスタイルの解釈について」で、当日は15名ほどの参加者がありました。

今回の講演ではBNCのspoken demographicのテキストを対象に、年齢による6グループおよび年齢・性別による12グループに分類したものをサブコーパスとし、各サブコーパス中の61のPOSタグの頻度について、統計手法には林の数量化 類を用いて、第1軸と第2軸での分析を中心に、サブコーパス間の関係・特定のサブコーパスに特徴的なPOSタグを明らかにした後、特徴語の抽出と使用例、社会階層と性別による8グループ分類のサブコーパスとした場合の分析結果の一端が紹介されました。

コメント [a3]: 空白行を数行しました。

まず、年齢で分類した6つのサブコーパスの分析では、第1軸の数値で年齢の高いグループから低いグループに並んでいたのが顕著でした。高橋先生はこの軸を *prestigious style vs. vernacular style* と解釈され、*vernacular style* として特徴的なタグには *wh-pronoun*、*wh-adverb*、*wh-determiner-pronoun*、*possessive determiner-pronoun*、*lexical verb の-s form*、*be* および *do* が、*prestigious style* として特徴的なタグには *unclassified items*、*cardinal numbers*、*comparative adjectives*、*existential there*、*of*、*subordinating conjunction* の *that* が指摘されました。

次に、年齢・性別で分類した12のサブコーパスの分析では、先の6つのサブコーパスでの分析で示された第1軸に加え、第2軸で性差が現れることが示されました。このうち、特にグラフ上で特徴的な位置に現れた「14歳以下の女性」と「60歳以上の女性」のサブコーパスを取り上げ、グラフ上で前者と近い位置に現れた所有代名詞・*lexical verb の-s form* と、後者と近い位置に現れた *unclassified items* のうち、それぞれ抽出された特徴語とその使用例が挙げられました。*lexical verb の-s form* に関しては、*I goes* の用例が BNC に 548 例もあるという事実は意外なものでした。

ここではまた BNC の spoken コーパスの表記の誤りが問題となった例として、「14歳以下の女性」に最も特徴的な所有代名詞として抽出された *its* が、原文を確認すると実際には *it's* の誤表記であるものが多かったことについての言及がありました。

最後に他の組み合わせによる分析の一例として、社会階層と性別による8グループ分類のサブコーパスとした場合が取り上げられ、この分析では第1軸で左からほぼ社会階層の高い方から低い方に並んだこと、同じ年齢グループでは女性がすべて右側に現れたことなどが述べられました。

以上の内容は、高橋先生が Lancaster 大学に提出された PhD 論文 *Typology of Registers in the British National Corpus: Multi-Feature and Multi-Dimensional Analyses* のうちの話し言葉に関するご研究の一部分とのことで、最後の30分ほどは講演の第2部として、日本で仕事を続けなが

らイギリスの大学で PhD を修了されたご経験について、必要な期間や諸経費、ご自身の渡航回数や滞在日数、指導教授の交代や指導スタイルの違いへの対応、英文の校閲についてなど、非常に踏み込んだ実情まで伺うことができました。海外の大学で PhD を取得することに関心のある会員も少なくないと思われませんが、実態についてここまで詳細なお話を聞ける機会というのはなかなか無いことで、大変貴重な企画だったのではないかと思います。個人的には、作文力に関しての「格調高い英文は要らない。今書いている文が理解してもらえるか、ということ」を常に考えて書く。」というお話が、短期間に PhD を修了された重要な秘訣と思われる大変印象に残りました。

また、ご本人がお話しになったことではありませんが、PhD 論文の執筆期間は英語コーパス学会事務局を担当されていた時期と重なっており、そういう点でも恐らくは人知れぬご苦労があたりだったことと思われ、頭が下がります。

前半・後半のいずれの講演の後にも活発な質疑応答や情報交換が行われ、大変充実した講演会でした。参加できて本当に良かったという思いを胸に会場を後にしました。

新刊紹介

ベーシック英語史

家入葉子 著
A5 版 124 頁
1,600 円+税
ひつじ書房
ISBN 978-4-89476-349-4



本書は「まえがき」で著者が述べている通り、従来の英語史のテキストに見られる時代別の章立てではなく「語彙の歴史」、「名詞の発達」、「動詞の発達」等、それぞれの発達史を古英語から現代英語までを通して概観する構成をとって

いる点、ユニークな英語史入門書である。また各項目にはエクササイズがあり身近な内容で学生の自主的な学習を促し、図書館での調査や *Oxford English Dictionary* 等の辞書に触れる格好の橋渡しとなっている。

紙幅の関係で全 15 章すべてを詳細には紹介できないが、特徴ある点をいくつか紹介したい。構成の点で目を引くのは、例えば第 7 章「指示代名詞と関係代名詞」で歴史的に指示代名詞が関係代名詞としての機能を持っていたという視点からの結合であり、第 11 章「非人称動詞と過去現在動詞」は前者が次第に衰退するのに対し、後者は法助動詞として発達する対比から結び付けている。図表では第 6 章「人称代名詞の発達」の she の s がつかない地域を示す現代英語の方言地図、第 9 章「主節と従属節」の中英語後期の方言地図 *A Linguistic Atlas of Late Medieval English* の南部に見られる三人称単数現在の -(e)th など専門書の資料も載せている。第 14 章「否定構文と助動詞 do の発達」では *I ne say > I ne say not > I say not* のように発達するのではなく、中英語期を通してこの 3 つの構文が共存状態にあったこと、また中英語後期には古くからあった *I ne say* と新しい *I say not* が残ったが、近年の英語史で初期近代英語に特徴的とされる *I not say* は古英語、中英語でも見られ、また初期近代英語でも限定的に韻文で見られるものがほとんどであるとの独自の研究に裏打ちされた記述がある。第 15 章「言語の揺れ」では前置詞のゆれを扱っているが、英米の文法書に *different from* の記述があるのは母国語話者にゆれがあることを示すものであるとの指摘や、「自分は *from* しか使わない」という母国語話者が実は *different to* になっていた、など著者の鋭敏な観察力が随所に見られる。

ベーシックというタイトルがついているものの、著者の広範囲な学識と鋭い観察力に裏打ちされた本書は近年の英語史研究の動向もとらえており、学生ばかりでなく研究者にとっても有益な本と言える。英語史の授業担当者にとって時代別のテキストでは時間の関係上、消化不良になりがちであるが、本書の構成ではテーマを絞って講義しても学生は古英語から現代英語ま

でを通して学ぶため、相応の充足感を得られるであろう。

著者は現在、京都大学大学院で教鞭を執られているが、特に中英語に造詣が深く、また否定の研究は国際的に高く評価されている。中英語期、イギリスの中部方言話者が北と南の言葉に通じていたことが標準英語の確立の強みであったとされるが、中英語を出発点として研究を深められてきた著者は、古英語と現代英語の両方に接点を持ち、本書はまさに格好の書き手を得たと言える。

鈴木 敬了(大東文化大学)
suzuki@h.biglobe.ne.jp